

現代中国語における諾否疑問文と 反復疑問文の使用に関する一考察 －テレビドラマを例として－

宮 本 大 輔¹

Abstract

This study examines issues related to the differences in the two types of interrogative sentences—yes/no and positive/negative types—in modern Chinese language used in Chinese TV drama. Generally speaking, the modern Chinese language has five types of interrogative sentences types: yes/no, positive/negative, wh-, disjunctive, and ones with ne. In many previous studies, yes/no and positive/negative interrogative sentence types were considered synonymously varying with each other. However, there is no much meaning difference between the two. Further, positive/negative type was not considered a polite interrogative sentence. I agree with researchers' view on positive/negative interrogative sentence types; however, I think we need to consider the differences in the hierarchical relationship levels of the speaker and hearer. This study aims to investigate the differences in the two types of interrogative sentences—yes/no and positive/negative from the view point of the speaker–hearer relationship. Results of this study indicate that the speakers in Chinese TV dramas use positive/negative interrogative sentences when they have to use it in the context of a hierarchical relationship. Therefore, this interrogative sentence type is inappropriate when communicating with your boss, except in cases wherein you have an intimate relationship with him/her.

キーワード：現代中国語，諾否疑問文，反復疑問文，使用傾向，ドラマ

0. はじめに

本稿は、現代中国語における2つの疑問文－諾否疑問文と反復疑問文の使用について、広義の敬語－即ち待遇表現の角度から考察したものである。

現代中国語の疑問文は次のように分類される。諾否（当否）疑問文：平叙文の文末に語気助詞の“吗”や“吧”をつけたもの²で、イントネーショ

ン上昇型疑問文を含む；反復（正反）疑問文：述語の肯定形と否定形を組み合わせたもの；選択疑問文：接続詞“还是”を用いた“A还是B”の形で、AかBどちらかの選択を求めるもの；疑問詞疑問文：“什么”，“谁”，“哪儿”，“什么时候”といった疑問詞を用いて尋ねるもの；省略疑問文：「名詞・代詞＋“呢”？」の形で文脈に依存して「～は？」という述語部分が省略されたもの。近年はこれに付加型疑問文（平叙文の末尾に“是不是”や“是吗”，“对吗”，“是吧”，“对不对”といった要素を用いるもの）を加える文法書もある。

このうち、諾否疑問文と反復疑問文は、文法的な制約という面で違いがある³ものの、何れも Yes/No で答えることのできる疑問文である。中国語ネイティブはこの2つの疑問文をどのように使い分けているのだろうか。

1. 先行研究

本章では、現代中国語における諾否疑問文と反復疑問文、敬語に関する先行研究を概観する。

まず、諾否疑問文と反復疑問文に関する先行研究である。両者の違いについては、同義異形とするもの（范 1982）⁴、意味的に大きな差はないとするもの（古川・鈴木 2016）、諾否疑問文は 50% 未満の確率で肯定的な答えが返ってくることを予測しているとするもの（Chao 2011）⁵、“～吗？”疑問文には（1）発話者が事前に肯定乃至否定の答えを予測している場合、（2）発話者にとって答えそのものは重要ではないか、答えを得ることが目的ではなく、何か別にある場合、（3）発話者は事前に答えを予測しておらず、受話者に答えを求めることを目的とする場合があるとし、（1）と（2）には“～吗？”疑問文しか使えないが、（3）については反復疑問文も使えるとするもの（Li&Thompson 1979, 刘 1987）⁶もある。また、反復疑問文は肯定と否定を畳みかけることによって問いを発するもので、その性質はしばしばはっきりした答えを要求する表現につながるとするもの（杉村 1994）もある。

上述のものとは異なる視点から諾否疑問文と反復疑問文を分析したもののとして、倉石（1969）や湯（1984）、沈（1992）をあげることができる。倉石（1969）と湯（1984）は諾否疑問文と反復疑問文の丁寧度に注目し、共に反復疑問文は丁寧な言い方ではないとした⁷。また、沈（1992）は諾否疑問文と反復疑問文に関する先行研究を整理したうえで、反復疑問文（原文では正反疑問文）は敢えて疑似選択の形を用いることにより、対内的に

話し手の疑いの度合いを強調し、対外的に聞き手の回答を要請する力を強める表現効果を持つ、疑問文としての“力”が強められた質問形式だと結論付けた。

次に、現代中国語における敬語に関する先行研究である。現代中国語には敬語がないとか、ほとんどないとか言われるが、それは日本語の敬語におけるような形態的手段による敬意表現はほとんどないということで、語彙的手段による敬意表現はいくつもあり（楊・柴田 1984:90）、相手への“礼貌”は、主に呼称表現、人称表現、一部の敬語語彙、婉曲表現と間接発話表現における丁寧さの調節機能に反映されている（彭 2012:201）。

具体的な例としては、親族呼称が厳格に定められており、親族に会った場合は、長幼の順に則り相手に呼びかけなければならないこと（王 1989, 易・金 2010）、多くの印欧諸語（フランス語の tu/vous やドイツ語の du/Sie など）と同様、2人称代名詞（你/您）の切り替え現象があること（王 1989, 彭 2012）、受話者への正しい呼称は親族間だけではなく、社会でも求められること（王 1989, 易・金 2010, 彭 2012）、“请”や“位”、“用”、“拜～”といった敬語語彙（王 1989, 易・金 2010, 彭 2012）、共通の意味に対し上品さや丁寧さが異なる複数の表現を使い分けること（王 1989, 易・金 2010, 彭 2012）などをあげることができる。

上述のような語彙的手段によるもののほか、命令、依頼、要求など相手の行為を拘束する行為賦課型発話行為では、相手の負担量を減らす副詞を付けたり、可能や能力を表す要素と同意確認の要素を含む疑問形式を使い、表現を間接化することによって、発話を丁寧にする（王 1989, 彭 2012）。

ここまで見てきた通り、上述のように、現代中国語における諾否疑問文と反復疑問文の使い分けについて、敬語の立場から論じたものは数が限られている。筆者は、自身の中国語使用経験やドラマを見たり、小説を読んだりすることによって得た語感から、諾否疑問文と反復疑問文の使用は、日本語における丁寧体と普通体と同様、発話者と受話者の関係によって左右されるという仮説を立てた。本稿では、この仮説の妥当性を明らかにすることを目的として、議論を進める。

2. 調査方法と概要

本研究では、ドラマの台詞から諾否疑問文及び反復疑問文の用いられた用例を網羅的に抽出し、どのような状況下で使用されているかを分析する。

調査対象をこの種の研究で一般的な小説ではなくドラマとしたのは、より自然言語に近いサンプルが入手可能であること、決まった人物間で行われる様々な場面での発話が大量に入手可能であること、言語行動と同時に非言語行動も確認可能であるため、発話者や受話者の感情を捉えやすいことなどをあげることができる。

言語資料として用いたのは、《新上海灘》(邦題：新上海グランド、全42話(約1890分))である。《新上海灘》は1930年代の上海を舞台とし、主人公がマフィアの一員となりながらも自身の正義を貫く姿を描いたものである。このドラマを選んだのは、上下関係や恋人関係、友人関係などの人間関係がはっきりと描かれており、諾否疑問文と反復疑問文の使用が、発話者と受話者の関係によりどのように変化するかを観察するうえで適していると考えたからである。

ドラマを言語資料として使用する際は、ドラマで使われている言葉が実際の話し言葉から乖離する可能性にも注意しなければならない。金水(2003)では、日本語のドラマや漫画、アニメ等で使用される言葉には、老人語や博士語、女性語等、現実とずれる役割語が存在することが指摘されている。一方で、井上(2004)はドラマで使われている言葉には脚本家の主観が入っている為、完全に自然なデータとは言えないかもしれないしつつ、研究する対象によっては、実際の話しことばと比べて理想的あるいは典型的な話しことばが記されているシナリオや小説の中の会話文の方がむしろ良質の材料を豊富に提供するものもあると結論づけている。

本稿で扱うのは、2つの形式を持つ疑問文の発話者と受話者の人間関係における言語使用傾向の違いであり、理想的あるいは典型的な話しことばが記されているとされるドラマのシナリオを対象としても現実の使用傾向から大きく乖離することはないと考えられる。

表1は調査対象とした言語資料から抽出された、2種類の疑問文の数と割合を表にしたものである。調査対象から抽出された疑問文のうち、諾否疑問文は1027(79.0%)、反復疑問文は273(21.0%)だった。現代中国語における疑問文の分類方法に則った場合、本来、諾否疑問文は語気助詞“吗”を用いた疑問文(以下、本文中では“吗”疑問文、表中では“吗”型と記す)、イントネーション上昇型疑問文(以下、本文中では上昇型疑問文、表中では上昇型と記す)、“吧”を用いた疑問文を含むとされるが、最後の“吧”を用いたものは、推量や確認の意味合いが強く、単純な疑問を表す“吗”

疑問文や上昇型疑問文とは意を異にするため、本稿では研究対象から除外する。また、“吗”を用いたものの中には、疑問文の形式を持ちながら、反語文となるものも存在するが、同様に本稿の研究対象からは除外する。

表1 新上海灘に現れた諾否疑問文と反復疑問文の数と割合

疑問形式	実数	割合
諾否疑問文	1027	79.0%
“吗”型	462	(35.5%)
上昇型	565	(43.5%)
反復疑問文	273	21.0%
合計	1300	100.0%

3. 調査結果と分析

3.1 分析結果 1

本節では、個別の例に先がけて、全体的な使用傾向を概観する。

まず、表2に基づいて、発話者と受話者が上下関係にある場合について考察する。表2は《新上海灘》の登場人物のうち、発話数が多い者を抽出し、発話者と受話者の関係（上司→部下、部下→上司、親→子、子→親）に応じて、2つの疑問文の使用数と使用頻度をまとめたものである。

一般的に発話者と受話者の関係が上司→部下の時、発話内容を丁寧にする必要性は最も低くなり、部下→上司の時、発話内容を丁寧にする必要性は最も高くなると考えられる。したがって、諾否疑問文は丁寧度が高く、反復疑問文は丁寧度が低いという筆者の仮説に則ると、発話者と受話者の関係が上司→部下の時、反復疑問文の使用頻度は最も高くなり、両者の関係が部下→上司の時、反復疑問文の使用頻度は最も低くなるはずである。表2では、上司→部下:24例(29.6%)、部下→上司:14例(26.4%)となっており、その差は3.2ポイントで、反復疑問文の使用頻度に大差はなく、筆者の仮説が棄却されたかのように見える。

だが、発話者と受話者の関係を更に細かく分類していくと、諾否疑問文と反復疑問文の使用頻度に差が見えてくる。まず、発話者と受話者の関係が上司→部下である時、トップ→側近の発話では、諾否疑問文が32例(80.0%)であるのに対し、反復疑問文は8例(20.0%)に過ぎない。だが、側近→側近以外の部下の発話では、諾否疑問文13例(72.2%)、反復疑問

文5例(27.8%), トップ→側近以外の部下の発話では, それぞれ12例(52.1%), 11例(47.8%)となっている。このことから, 発話者(上司)と受話者(部下)の関係が遠くなるほど, 諾否疑問文の使用頻度が低下し, 反復疑問文の使用頻度が増加する傾向にあることが分かる。

次に, 発話者と受話者の関係が部下→上司の時, 側近→トップの発話では, 諾否疑問文が23例(63.9%)であるのに対して, 反復疑問文が13例(36.1%)である。だが, 側近以外の部下→側近の発話では, 諾否疑問文7例(87.5%), 反復疑問文1例(12.5%), 側近以外の部下→トップの発話では, それぞれ8例(100%), 0例(0%)となっている。このことから, 発話者(部下)→受話者(上司)の関係が遠くなるほど, 諾否疑問文の使用頻度が増加し, 反復疑問文の使用頻度が低下していることが分かる。なお, 側近→トップでは単純な動詞や形容詞の反復疑問文ではなく, 相手の意志を確認するようなニュアンスを持つ助動詞の反復疑問文が多用されていた。

そして, 発話者と受話者の関係が親子である場合, 親→子の発話では諾否疑問文30例(83.3%), 反復疑問文6例(16.7%), 子→親の発話では諾否疑問文18例(60.0%), 反復疑問文12例(40.0%)となっている。本来は親が上で子が下となるため, 筆者の仮説に従えば, 親→子の発話における反復疑問文の使用頻度が増加するはずである。しかし, 親と子の関係には, 通常の上司と部下の関係以上にウチソトの関係が色濃く反映されるものである。

表2 上下関係における疑問文の使用傾向⁸

関係	項目	諾否疑問文		反復疑問文	合計	発話数
		“吗”型	上昇型			
上下関係	上司→部下	22 (27.2%)	35 (43.2%)	24 (29.6%)	81 (100%)	715
	トップ→側近	10 (25.0%)	22 (55.0%)	8 (20.0%)	40 (100%)	366
	トップ→側近以外の部下	7 (30.4%)	5 (21.7%)	11 (47.8%)	23 (100%)	224
	側近→側近以外の部下	5 (27.8%)	8 (44.4%)	5 (27.8%)	18 (100%)	125
	部下→上司	7 (13.2%)	32 (60.4%)	14 (26.4%)	53 (100%)	745
	側近→トップ	2 (5.6%)	21 (58.3%)	13 (36.1%)	36 (100%)	397
	側近以外の部下→トップ	3 (37.5%)	5 (62.5%)	0 (0.0%)	8 (100%)	222
	側近以外の部下→側近	2 (25.0%)	5 (62.5%)	1 (12.5%)	8 (100%)	126
	親子	14 (21.2%)	34 (51.5%)	18 (27.3%)	66 (100%)	477
	親→子	7 (19.4%)	23 (63.9%)	6 (16.7)	36 (100%)	234
子→親	7 (23.3%)	11 (36.7%)	12 (40.0%)	30 (100%)	243	

次に、表3に基づいて、発話者と受話者が対等関係にある場合について考察する。表3は《新上海灘》の登場人物のうち、発話数が多い者を抽出し、発話者と受話者の関係（恋人、親友、元同級生、友人、敵対）に応じて、2つの疑問文の使用数と使用頻度をまとめたものである。

表3を見ると、反復疑問文の使用頻度は、発話者と受話者の関係が友人（男性⇔女性）である場合（36例（31.6%））、親友（男性⇔男性）である場合（25例（26.9%））に高い。一般的に発話者と受話者の関係が対等である時、発話を丁寧にする必要性が低くなることに伴い、内容を調節する必要性も低くなるため、発話者と受話者の関係が親友や恋人といった近いものである場合に最も顕著に表れると推測していた。だが、上述したように、反復疑問文の使用頻度が最も高い友人（男性⇔女性）であっても31.6%と突出して高い数値ではなかった。だが、表3において発話者となるのは、組織の中では「側近以外の部下」に位置するものが多く、組織のトップに対する発話での反復疑問文の使用頻度は0%であった。このことを考慮すると、やはり対等関係における反復疑問文の使用頻度は大幅に増加していると言うことができる。

一方、諾否疑問文の使用頻度は、発話者と受話者の関係が元同級生（男性⇔女性）である場合（46例（92.0%））、恋人（男性⇔女性）である場合（120例（91.6%））、親友（女性⇔女性）である場合（48例（81.4%））に高い。先ほども述べたように、発話者と受話者が対等関係にある場合、発話を丁寧にする必要性は低くなると考えるのが自然である。だが、表3では、諾否疑問文の使用頻度が70%以上となっている箇所が多く見られる。これには、Labov（1972）が明らかにした発話者の社会階級差や田中・田中（1996）が言及している性差、そして学歴といった要素が影響を及ぼしている可能性が高い。発話者と受話者の関係が元同級生（男性⇔女性）、恋人（男性⇔女性）、親友（女性⇔女性）の場合、発話者は性別に関わらず、出身家庭の社会階級が高く、受話者が誰であるかに関わらず、威信の高い言葉を話していると推測できる。

発話者と受話者の関係が親友（男性同士）である場合、諾否疑問文（68例（73.1%））と反復疑問文（25例（26.9%））の使用頻度は他の場合と同程度のように見える。だが、内訳を見てみると、発話者により、諾否疑問文と反復疑問文の使用傾向が異なることが分かる。具体的には、许文強（表中では男性X）→丁力（表中では男性D）の発話の時、諾否疑問文：41例

(91.1%), 反復疑問文：4例(8.9%)であるのに対し、丁力→许文強の発話の時、諾否疑問文：56.3%, 反復疑問文：43.8%となっている。同じ親友同士であるにも関わらず、発話者の違いによって、反復疑問文の使用頻度になぜこれほど多くの差が生じるのだろうか。上述のように、筆者は発話者の学歴が影響を及ぼしていると考ええる。

表3 対等関係における疑問文の使用傾向

関係	項目	諾否疑問文		反復疑問文	合計	発話数
		“吗”型	上昇型			
対等関係	恋人	77 (58.8%)	43 (32.8%)	11 (8.4%)	131 (100%)	606
	男性→女性	19 (48.7%)	15 (38.5%)	5 (12.8%)	39 (100%)	292
	女性→男性	58 (63.1%)	28 (30.4%)	6 (6.5)	92 (100%)	314
	親友 (男⇔男)	28 (30.1%)	40 (43.0%)	25 (26.9%)	93 (100%)	694
	男性 X → 男性 D	22 (48.9%)	19 (42.2%)	4 (8.9%)	45 (100%)	326
	男性 D → 男性 X	6 (12.5%)	21 (43.8%)	21 (43.8%)	48 (100%)	368
	親友 (女⇔女)	22 (37.3%)	26 (44.1%)	11 (18.6%)	59 (100%)	273
	女性 F → 女性 W	12 (41.4%)	11 (37.9%)	6 (20.7%)	29 (100%)	127
	女性 W → 女性 F	10 (33.3%)	15 (50.0%)	5 (16.7%)	30 (100%)	146
	元同級生 (男⇔女)	30 (60.0%)	16 (32.0%)	4 (8.0%)	50 (100%)	268
	男性→女性	6 (42.9%)	8 (57.1%)	0 (0.0%)	14 (100%)	127
	女性→男性	24 (66.7%)	8 (22.2%)	4 (1.1%)	36 (100%)	141
	友人 (男⇔女)	39 (34.2%)	39 (34.2%)	36 (31.6%)	114 (100%)	556
	男性→女性	18 (32.7%)	14 (25.5%)	23 (41.8%)	55 (100%)	288
	女性→男性	21 (35.6%)	25 (42.4%)	13 (22.0%)	59 (100%)	268
	敵対関係 (男⇔男)	9 (13.8%)	41 (63.1%)	15 (23.1%)	65 (100%)	503

3.2 分析結果 2

3.2.1 個別の例 (上→下)

本節では、発話者と受話者の関係が上→下となる場合を考察する。まず、冯敬尧(トップ)→祥叔(側近)の発話である。冯敬尧→祥叔の発話では、諾否疑問文25例(“吗”疑問文：9例, 上昇型疑問文：16例), 反復疑問文5例が確認された。(1)は冯敬尧が祥叔に対して、丁力が冯程程につり合っているか否かを尋ねた発話である。祥叔は言いよどんでいるが、さらに本当のことを言うようにと答えを促している。(1)のやりとりを観察すると、冯敬尧が最初に発した“吗”疑問文は、冯敬尧は祥叔の答えが分かっていた上で発したものであるように考えられる。

(1) 冯敬尧：你觉得阿力这个小子……配得上程程吗？

祥 叔：这个……

冯敬尧：讲实话。

祥 叔：南辕北辙，天壤之别。

(2) は冯敬尧が祥叔に対して、冯程程（娘）と许文强（側近以外の部下）が恋人同士なのか否かを尋ねた発話である。副詞“到底”を用いていることから、受話者に質問に対する答えを強く求める発話だと判断することができる。(3) は冯敬尧が祥叔に対して、敵対勢力に誘拐された冯程程（娘）の行方について、何か情報があったか否かを尋ねた発話である。語気の強さや発話速度、修飾語のような余分な要素を一切使っていないことなどから、発話者の焦燥感が感じ取れる。(3) は動詞“有”を用いたオープンタイプ⁹の反復疑問文で、冯敬尧（トップ）→祥叔（側近）の発話の発話で多く確認された。

(2) 冯敬尧：程程和文强……你是旁观者，你给我说句实话。这两个人到底是不是一对儿啊？为什么总是三天两头儿地闹别扭？

祥 叔：这事让我说呀，冯先生您别太着急，也别担心。这个年轻人的事就让他们随缘好了。

(3) 冯敬尧：那边儿有什么消息没有？

祥 叔：现在还没有。我又派人过去了。他就是钻到地底下，我也得把他挖出来。

次に、冯敬尧（トップ）→许文强（側近以外の部下／娘の恋人）の発話である。冯敬尧→许文强の発話では、諾否疑問文7例（“吗”疑問文：4例，上昇型疑問文：3例），反復疑問文8例が確認された。(4) は、冯敬尧が抱えている仕事に目途が立った许文强に対して、休息をとる意志があるか否かを尋ねた反復疑問文である。意志の助動詞“要”を用いて尋ねることにより、受話者である许文强の意志を尊重するような語気になる。本来、冯敬尧にとって、许文强は側近以外の部下であるため、冯敬尧が许文强に対してこれほど気遣いをする必要はない。また、冯敬尧の質問に対して、许文强はそんな時間を取るようなときではないと婉曲に断っている。トップと側近以外の部下という上下関係のみを考慮するならば、トップの提案を

断ることはあってはならないことだろう。だが、許文強が娘の恋人で将来の婿になる可能性がある者という、ウチソトの関係がここでは強く表れており、上下関係に使われるべき発話行為からウチソトで使われる発話行為にシフトしたものと考えられる（宮本 2015）。

(4) 冯敬尧：你有些累了。要不要休息几天？和程程一起玩儿一玩儿。

许文强：在这个节骨眼儿上哪有那么多时间啊？

(5) は、冯敬尧が许文強に対して、自分たちと敵対しているイギリス商人について、なぜ自分たちに難癖をつけてくるか考えたことがあるか否かを尋ねた、オープンタイプの反復疑問文である。だが、その後、自身でその理由を述べており、受話者の许文強は冯敬尧の考えを確認するような発話をしただけである。即ち、冯敬尧は许文強に反復疑問文を発してはいるが、受話者に答えを述べさせようとしたものではないと言えるのではないだろうか。刘（1987）は、発話者が答えを得ることを目的としていない場合は諸否疑問文しか使うことができず、反復疑問文は発話者が事前に答えを予測しておらず、受話者に答えを求めることを目的とする場合にしか使うことはできないと結論付けているが、上述の通り、(5) は受話者に答えを求めていない状況であるにも関わらず、反復疑問文が使用されている。同様の例が丁力の発話にも見られた（例（12）参照）。

(5) 冯敬尧：摩利士凭什么跟我们过不去呀？想过没有？俗话说得好啊：“人为财死，鸟为食亡”。就是因为半路杀出来了一个程咬金……王国魂！才是问题的关键。

许文强：冯先生的意思是……这个王国魂……能给摩利士更多的好处。

この他、冯敬尧（父）→冯程程（娘）の発話には（6）のような例も見られた。（6）は、恋人（许文強）が自分から離れて広東に行くとき、悲しんでいる冯程程（娘）の様子を見て、冯敬尧が発したものである。この例で特徴的なのは、“吗”疑問文と反復疑問文を併用しているという点である。先行研究にあるように、“吗”疑問文は相手の肯定的な回答が期待されており、反復疑問文には一切の予測が含まれということであれば、相反する2つの疑問文を（6）のように連続して使用することは難しいと考えられる。同

様の例が丁力の発話にも見られた（例文（13）参照）。

- (6) 冯敬尧：我说，他离不开上海滩，我会留住他。爸爸说过的话，大都会兑现的。相信吗？相信不相信？
冯程程：……（点头）

3.2.2 個別の例（下→上）

本節では、発話者と受話者の関係が下→上となる例を考察する。まず、祥叔（側近）→冯敬尧（トップ）への発話である。祥叔→冯敬尧の発話では、諸否疑問文 19 例（“吗”疑問文 1 例，上昇型疑問文 18 例），反復疑問文 13 例が確認された。祥叔→冯敬尧の発話で確認された，諸否疑問文の大部分は上昇型疑問文が占めているが，そのうち 12 例は冯敬尧に対する聞き返しの表現¹⁰であり，6 例は冯敬尧の意向を確認する表現だった。(7) は，自分たちを裏切った许文强を殺せという命令を下した，冯敬尧に対して祥叔が発した上昇型疑問文である。本当に殺して良いのかと，冯敬尧の考えを確認するものとなっている。

- (7) 祥叔：我已经派阿中，阿华保护小姐了。您……真要死的？
冯敬尧：活着天龙会也不会放过他。死了的好，少受点儿罪。

祥叔→冯敬尧の発話で確認された，反復疑問文は全て助動詞“会（推量）”や助動詞“要（意志）”，確認の語気を示す“是不是”を用いたもので，自分の意見を示しつつ，相手の考えを聞くようなものばかりであった。(8) は，自分たちが買い付けた商品が奪われた際，祥叔が冯敬尧に対して発したもので，商品を奪った者たちが全て返しさえすれば，彼らを許してやることを確認する語気が含まれている。一方，(9) は側近以外の部下である许文强と丁力が敵対勢力との抗争の末，行方不明になった際，祥叔が冯敬尧に対して発したもので，人を動員して彼らを搜索させるという自分の考えを述べつつ，冯敬尧の意向を確認するような語気が含まれる。この結果は，表現を間接化することによって，発話を丁寧にするという王（1989），彭（2012）の記述と一致している。

- (8) 祥叔：真要是他们都把枪还了……是不是放他们一马？也让他们欠

咱们一个人情。

冯敬尧：把命给他留下吧。省得其他堂口说我残暴。

(9) 祥 叔：是啊，啊，要不要派人找找他们？

冯敬尧：猫有九条命。该回来的时候他自然就回来了。这点沟沟坎坎过不去，回来也是个废物。

このように、助動詞を用いた反復疑問文の場合は、単純な動詞や形容詞を用いた反復疑問文とは異なり、下から上への発話であっても使用することが可能であると考えられる。ただし、側近以外の部下からトップへの発話において、反復疑問文は一例も見られなかったことから、上記のような例が現れる為には、冯敬尧と祥叔がそうであるように、発話者と受話者が強い信頼関係で結びついている必要があるとすることができる。

3.2.3 個別の例（対等）

本節では、発話者と受話者の関係が対等となる例を考察する。まず、親友関係にある许文强→丁力の発話である。许文强は、どの相手に対しても、反復疑問文は余り使用していないが、丁力に対しては4例使用している。そのうち3例が(10)のように、怒りの感情の下で相手を詰問する際に用いられている。(10)は、许文强が丁力に発した反復疑問文で、自身が尊敬する人物を丁力が死に追いやったことを詰問する語気を含んでいる。

(10) 许文强：臭小子！你小子是不是人哪？我打死你！说！谁让你去纱场的？说！说！

丁 力：你打我干什么？冯先生，祥叔给我下的命令！你打我干吗？

许文强：你小子！（踢了一脚）冯敬尧让你杀谁你就杀谁？这么善良老人都被你给逼死了！你小子还有没有人性？

次に、丁力→许文强が発話である。丁力→许文强が発話では、反復疑問文が用いられる頻度は21例で、比較的多く使用されていることが分かる(例(11))。これは一体何故なのだろうか。筆者はこの現象を以下のように考察する。丁力は元梨売りで、劇中に许文强から字を習っているシーンがあることから、学校教育を受けていないと判断できる。これに対して、

対等関係に属する他のどの場合－恋人間，親友間，異性の友人間においても，発話者は大学卒業以上の学歴を持っている。このことから，先に示した相手の意向を確認するタイプ以外の反復疑問文の使用は，発話者と受話者の関係だけではなく，発話者の学歴とも関係があると考えられる。

- (11) 丁 力：强哥，你肚子饿不饿？
 许文强：我说饿，你有吃的吗？
 丁 力：那我告诉你一个止饿的办法。

この他にも，丁力が许文强に発した疑問文の中には，(12)，(13) のようなものがある。(12) は“到底”を伴い，受話者に強く答えを求める反復疑問文を用いているにも関わらず，疑問文を発した直後に答えを述べ，自問自答しており，受話者の答えを求めない，事前に答えを予測した文脈となっている。したがって，(12) は先に示した(5)と同様，刘(1987)の結論に対する反証となっている。

- (12) 丁 力：我就是想问问你。你到底喜欢不喜欢冯小姐？我知道冯小姐喜欢你，我还知道你也喜欢冯小姐。我从你眼睛里边就能看出来。

(13) は，冯程程がフランスへ行くことを知った丁力が発したものである。この例で特徴的なのは，先の例(6)と同様，“吗”疑問文と反復疑問文を併用しているという点である。先行研究にあるように，“吗”疑問文は相手の肯定的な回答が期待されており，反復疑問文には一切の予測が含まれということであれば，相反する2つの疑問文を(13)のように連続して使用することは難しいと考えられる。

- (13) 丁 力：强哥，你就是自己骗自己。强哥，我问你一个问题，你认真地回答我。你真的希望程程走吗？强哥，你认真地告诉我。你不是真的希望程程走？
 许文强：……（许文强什么都没回答）

4. まとめ

本稿では、テレビドラマ《新上海灘》を言語資料として、現代中国語における諸否疑問文と反復疑問文の使用傾向について、発話者と受話者の人間関係をもとに、待遇表現という角度から分析してきた。その結果、以下のことが明らかになった。

まず、反復疑問文は相手に強く答えを求める疑問形式であり、発話者と受話者の関係が強い信頼関係で結ばれている場合（子→親、側近→トップ）を除いて、下→上の発話では使用が避けられる疑問形式であると考えられる。

次に、“吗”疑問文については、発話者と受話者の関係に関わらず使用できる疑問文ではあるが、本研究の分析結果から見ると、学歴の高い者、出身家庭の社会階級が上の者、女性の使用頻度が高かった。

最後に、一つの発話において、同じ内容の疑問文を述べるために、“吗”疑問文と反復疑問文を連続して用いているものが散見されており、先行研究にある刘(1987)における、“吗”疑問文で発話者は回答を予測しているが、反復疑問文で発話者は事前に何の予測もしていないという結論は覆されることが考えられる。

本稿で行ったのは、テレビドラマを通じた調査・研究である。だが、現在のところ、テレビドラマを一つ調査対象としたケーススタディに過ぎず、中国語には構文の使用による待遇表現があるという筆者の仮説を普遍化するには不十分である。今後は、テレビドラマや小説などから、さらに多くの言語資料を収集すると同時に、質問紙調査やインタビュー調査なども実施し、より中国語ネイティブの言語使用実態に近い研究結果を得られるよう努めたい。

註

- 1 長野大学環境ツーリズム学部助教
- 2 “吧”を用いた疑問文は、推測や確認の語気を持つ。本稿では、反復疑問文と対比することが目的であるため、単純な疑問の意味を持たない、“吧”を用いた疑問文は分析の対象外とする。
- 3 諸否疑問文は文末の“吗”を用いず、イントネーションを上昇調にすることによっても表すことができるが、反復疑問文はできない；諸否疑問文の述語の前には、“也”や“都”といった副詞を置くことができるが、反復疑問文では前述のような副詞を述語の前に置くことはできない；反復疑問文の述語の前には、“到底”、“究竟”の

ような副詞を置くことができるが、諾否疑問文の述語の前には前述のような副詞を述語の前に置くことはできない。

- 4 是非問句可以用多种不同的句法形式来表达同一个语义内容，是一种同义歧形句（范1982：433）。
 - 5 This form of a question contains either a slight or considerable doubt about an affirmative answer, implying a probability of less than 50%. (Chao2011：803)
 - 6 The V-not-V question is used only in a neutral context whereas the particle-question may be used in a neutral or a non-neutral context. (Li&Thompson：202)
- “S 吗”的意向有三种情况：（1）问话人预先有倾向性的答案，问话的目的是为了从对方得到答案。（2）答案对问话人并不重要，或问话的目的不是求得答案，而是另有目的。（3）问话人预先没有倾向性的答案，问话的目的是为了从对方得到答案。—中略—在（1），（2）两种情况下，只能用“S 吗”问句，不能用正反问句。在（3）的情况下，如果不考虑预期方面的差异而且结构又容许，“S 吗”问句可以用正反问句替换（刘1987：118）。
- ただし、Li&Thompson (1979) は、刘 (1987) の (2) には言及していない。
- 7 Zhè shì qiānbǐ ma? というのは、いちばん自然な形で、自分の予想をたしかめるだけですが、Zhè shì qiānbǐ bushi? はおなじくたしかめながらも、軽くききかえすような語気になり、Zhè shì bushi qiānbǐ? は自分の気持をむきだしにしたつよい口調で、念をおすような語気になりますので、その場によって使い分けなくてはなりません（倉石1969：60）。
- 正反問句常常是冷漠，不親切甚至不禮貌的問句（湯1984：346）。
- 8 表中の「合計」は発話者から受話者に対して発話された、諾否疑問文と反復疑問文の数の合計を意味する。また、発話数は発話者から受話者に対して発せられた台詞の合計を指す。なお、小数点以下第二位を四捨五入している為、合計が100%にならない場合もある。以下同様。
 - 9 反復疑問文を構築する要素—動詞の肯定形と否定形が隣接せず、目的語を挟む形で現れるタイプのもの。動詞の肯定形と否定形が隣接して現れるタイプものはクローズタイプと呼ばれる。
 - 10 7例は問投詞“啊”を用いたもの、3例は人称代詞“我”を用いたもの、2例は人名や工場名を用いたもの

引用文献

- 井上次夫 2004. 「会話文の言語資料性」, 『小山工業高等専門学校研究紀要』第36号, 1-10.
- 金水敏 2003. 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』. 東京: 岩波書店.
- 倉石武四郎 1969. 『ローマ字中国語語法』. 東京: 岩波書店.
- 丸尾誠 2010. 『基礎から発展までよくわかる中国語文法』. 東京: アスク出版.
- 宮本大輔 2015. 「人間関係から見る語気助詞“啊, 呢, 嘛”の使用—『新上海灘』を例として—」, 『長野大学紀要』第37巻第1号, 17-26.
- 彭国躍 2012. 「中国語敬語表現の歴史と現状」, 三宅和子・野田尚史・生越直樹編, 『配

- 慮」はどのように示されるか』189-210. 東京：ひつじ書房.
- 沈国威 1992. 「中国語における正反疑問文とその選択原理について」, 樟蔭女子学院大学文学研究室編『文林』第26号, 37-66.
- 杉村博文 1994. 『中国語文法教室』. 東京：大修館書店.
- 田中春美・田中幸子 1996. 『社会言語学への招待 社会・文化・コミュニケーション』. 京都：ミネルヴァ書房
- 飛田良文 et al. 2009. 『日本語学研究事典』. 東京：明治書院.
- 王鉄橋 1989. 「現代中国語の敬語表現—日本語との比較—」, 立教大学『言語と文化』第2号, 25-48.
- 易洪艶・金春子 2010. 「日本語と中国語における敬語表現の比較」, 『福井工業大学研究紀要』第40号, 545-554.
- 楊慧珠・柴田武 1984. 「中国社会における敬語表現」, 『言語』1984年6月号, 90-100.
- 刘月华 1987. 用“吗”的是非问句和正反问句用法比较. 中国社会科学院语言研究所现代汉语研究室编, 《句型 and 动词》117-138. 北京：语文出版社.
- 湯廷池 1984. 國語疑問句研究續論. 湯廷池 (1988). 《漢語詞法句法論集》313-399. 台北：台灣學生書局.
- 朱德熙 1982. 《语法讲义》. 北京：商务印书馆.
- Chao, Yuan Ren. 2011. *A grammar of spoken Chinese*. Beijing: The Commercial Press.
- Labov, William. 1972. *Sociolinguistic patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Li, Charles N. & Thompson, Sandra A. 1979. "The pragmatics of two types of yes-no questions in Mandarin and its universal implications." *CLS15*. 197-206.